

研修名 食育研修1（離乳食）北部・講習

平成28年7月19日（火）10:00～16:00

講演 「離乳食で大切にしたいこと」

講師 Grain 伴 亜紀 氏



1 講演要旨

- 1) 離乳食の進め方の目安
- 2) 離乳の開始時期～離乳の完了
- 3) 咀嚼機能の発達の目安について
- 4) 手づかみ食について
- 5) 子どもの発達・発育を保障する家庭と保育所の連携した食事の対応
- 6) 日本食品標準成分表2015年版

2 感想

- ・ 幼児食を基本にどのような献立にしたいか？⇒給食は保育の中の一環であり子どもの心身の成長発達に欠かせないものである。また保育所の給食の特徴として保育所に入所する子どもは0歳から6歳までと、十分な栄養補給の対応が最も重要な時期である。食事の提供は一人ひとりの子どもの特性や成長・発達に合わせて味・量・形態等を対応していくことが必要である。
- ・ 食べる⇒食に興味を示すことが大切（家庭菜園）。
- ・ 体調不良・食物アレルギー障害のある子どもなど一人一人の子どもの心身の状態に応じ、嘱託医・かかりつけ医等の指示や協力の下に適切に対応することが大切である。また食物アレルギーなどへの対応が必要な子どもが増えている。子ども自身が自分の食物アレルギーの状況を自覚し、食物アレルギーを有していることを自身の言葉で伝えることが困難な年齢であることなども踏まえ、保育所では個々の状況を把握するよう留意するとともに異変時の対応等に備え、平素より危機管理体制を構築しておくことが大切である。
- ・ 離乳期は、吸うことから食べる機能への獲得期である。そのためには、子ども一人ひとりの離乳進行に合わせた調理形態で作り、咀嚼機能を引き出す支援が重要(食べやすさの中に食材の大きさ・固さ・調理の方法)。開始月例や進み方の状態を保護者との聞き取りの中で出来るだけ把握し、保育所と家庭が連携して行うことが必要である。
- ・ 手づかみ食は、食べ物を目で確かめて、手指でつかんで、口まで運び口に入れるという目と手と口に入れるという行動の発達。繰り返すうちにスプーンや食器に関心を持ちはじめ自分でやりたいという意欲が出てくるので、自分で食べる機能の発達を促す観点からも手づかみ食が重要になる。
- ・ 子ども達が安全な日常生活をおくるために、必要な基礎知識を持ち、それぞれの職種の職員が、専門性を活かした対応をしていくことが重要だと思いました。

（記録 舞鶴市立中保育所 高井 明美）